



ジョイフル コミュニケーション!
Salesian Bulletin Japan

ドン・ボスコの風

No.
19
July
2017

特集

“家庭”は 命と愛の学び舎



— 連載インタビュー ドン・ボスコの教え子たち —

株式会社クラチ 代表取締役社長 **倉知恒久さん**

— ドン・ボスコのトモダチが暮らす街 —

ウランバートル／モンゴル国

— つながれ! サレジオ青年 SYM JAPAN —

第3回 Salesian Youth Day **青年夜間巡礼**

若者によるプロジェクト始動! **VIDES JAPAN**

— サレジアンピープル —

“Pedal for Humanity”

ヤコブ・シュタインクールさん エルネスト・ロイグ・カンピさん

— サレジオ家族探訪 —

サレジアニ・コオペラトール

東アジア・オセアニアEAO地域大会 in 東京／若者の集い

— サレジアンスクールライフ! レポート —

都城聖ドミニコ学園／城星学園／星美学園／静岡サレジオ／日向学院／大阪星光学院／サレジオ学院

こんにちは！濱口です



家庭は安心できる場

実家は長崎県佐世保市の大崎ですが、父も母も幼い頃は長崎県の五島で生まれました。両親とも5歳の頃に佐世保に移り、後に結婚しました。家族構成は父母と11人の兄弟姉妹で私は末っ子です。

父は漁師でした。夕方漁に出て行って朝帰り、昼間は寝るという生活でした。でも食べ物も十分でなかったのが畑もしていました。だから働く父親の姿が目には焼き付いています。忙しいはずなのに、教会でも学校でも何らかの役を引き受けていました。母親は全面的に父親に従う人で本当に素朴な人でした。両親から学んだのは、日常生活の中で人のため、みんなのために生きることです。自分の家族だけが幸せであればいいのではなくて、地域みんなの幸せも考えるということです。父が漁でとってきた魚の中には市場では売れないものが多々ありました。蛸とか鱈などもそうです。母はそれを茹でた後、近所に配るように、私に託しました。そんなに裕福ではない時代です。でもみんなが助け合って生きていました。父も母も聖書の言葉をよく知っていたとは言えませんが、聖書の言葉を生きていたんだなと思います。

私にとって家庭は安心できる場です。子どもなりに自由に甘えられる場、それを包み込んでくれる場が家庭でした。毎日のように近所の男の子と海に行き遊びました。父母がおり、兄弟姉妹がいる家、そこに帰る時に何とも言えない安心を感じたものです。

大切にされた体験によって人は安心します。安心できればエネルギーが湧いてきます。共に歩んでくれる人がいるだけで、人は安心し、エネルギーを感じて困難があっても何とか越えようとします。信仰を持つ人にとって、共に歩んでくださるのは神さまですが、やはり具体的に関わるのは人なのです。私も心を込めて人と関わり、安心をもたらす者になりたいと願っています。

サレジオ会日本管区 副管区長

濱口 秀昭 神父

2017年7月25日 使徒ヤコブの祝日に



1965年8月、濱口神父が7歳の時の家族写真。前列左から本人(7男)、甥(長女の長男)、姉(5女で現在サレジオン・シスターズの八重野シスター)、中列左から兄(6男)、兄(5男)、母、姉(4女)、後列が父。

はまぐち ひであき

1958年長崎県佐世保市生まれ、59歳。長崎南山高等学校、上智大学を卒業、32歳で司祭叙階。東京サレジオ学園副園長、高松教区会計などを経て、2012年4月より調布サレジオ神学院長、兼2015年1月よりサレジオ会日本管区副管区長。趣味は自然を味わうこと(海遊び、登山、魚・山菜料理を食べる、写真撮影など)。



2017年2月、ベトナムでの黙想会の後、今の「家族」である調布サレジオ神学院の神学生たちと濱口神父、ベトナムのジョセフ・グエン管区長と一緒に。

ジョイフル コミュニケーション!

ドン・ボスコの風

Salesian Bulletin Japan No.19 July 2017

Contents もくじ

4 特集 “家庭”は命と愛の学び舎

ゆるし、愛を学ぶ“家庭” サレジオ会総長 アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父

家族のように共に生きる 児童養護施設 星美ホームでの取り組み

人とつながる勇気をもつ強さを 臨床心理士 遠藤愛さん

夢と信念、助け合う開かれた家族 サレジオ会日本管区長 マリオ山野内倫昭神父

10 連載インタビュー
ドン・ボスコの教え子たち 株式会社クラチ 代表取締役社長 倉知恒久さん
“「共にいる」という教育方針にはとても共鳴します。”

12 ドン・ボスコのトモダチが暮らす街 Don Bosco Amici
ウランバートル／モンゴル国

14 (Salesian People) “Pedal for Humanity”

ヤコブ・シュタインクールさん、エルネスト・ロイグ・カンピさん /ドイツ管区/ドイツ・ケルン

18 サレジオ家族探訪 Visit the Salesian Family

サレジオニ・コオペラトリー Associazione Salesiani Cooperatori (ASC)

東アジア・オセアニアEAO地域大会 in 東京／若者の集い

22 つながれ! サレジオ青年 SYM JAPAN Salesian Youth Movement Japan

第3回 Salesian Youth Day **青年夜間巡礼**

若者によるプロジェクト始動! **VIDES JAPAN** ヴィーデス ジャパン

26 サレジオン スクールライフ! レポート

都城聖ドミニコ学園／城星学園／星美学園／静岡サレジオ
日向学院／大阪星光学院／サレジオ学院

16 世界のサレジオ家族ニュース / 28 サレジオ家族 国内ニュース / 31 サレジオ情報募集

今号の表紙



イラスト © 鈴木ぐり 2017

食卓をさまざまな年齢や国籍の人が囲んで、食事が始まるうとしている。楽しい気分の人も、つらい気持ちを抱えた人も、一つの食卓を囲み、互いを受け入れ、奉仕し合う。大きな家族のように。



ドン・ボスコとは?

「青少年の友」と呼ばれ、助けを必要とする若者たちのために生涯をささげた神父。1815年イタリア生まれ、名前はヨハネ(イタリア語でジョヴァンニ)。ドン・ボスコは「ボスコ神父」の意味)。青少年教育に献身するサレジオ会を創立。1888年殉教。1934年列聖。

サレジオ家族とは?

ドン・ボスコの精神を受け継ぐ修道者・信徒・協力者たち。世界130以上の国で、31団体、40万人以上のメンバーが、学校、教会、社会生活のさまざまな場面で青少年や貧しい人びとのために奉仕している。サレジオファミリーとも呼ばれる。

サレジオン・ダイアリー vol.02

「Once a Bosconian.....」

2012年からDBVG(ドン・ボスコ海外青年ボランティアグループ)の担当となり、ソロモン諸島派遣の引率も今年で6回目。毎年お腹の不調とマラリアの恐怖!?に怯えながらも、若者たちと一緒にシンプル&ワイルドなソロモンライフを楽しんでいる。

滞在するガダルカナル島のサレジオ農業学校の宿舎の壁に「Once a Bosconian, Always Bosconian」とある。「一度ボスコニアン(サレジオ学校の生徒)になれば、いつまでもボスコニアンだ!!」いい言葉だ。世界のドン・ボスコの学校で学んだ若者たちが「Bosconian」として成長し社会で役割を果たしていくのだ。さあ、今年はどうなソロモン&日本のBosconianに会えるだろうか? 今からワクワクしている。



三島 心 神父
みしま しん

1973年生まれ。43歳。サレジオ会青少年司牧担当、碑文谷教会助任。趣味はスポーツ観戦。

Every home, a School of Life and Love

特集

“家庭”は 命と愛の学び舎

「家庭」は、今年のサレジオ家族年間目標のキーワードだ。

私たちは家庭に生まれ、生きることに愛することを学びながら成長していく。家庭と聞いて「ほっとするやすらぎの場」を連想する人もいるだろう。しかし、どの家庭にも、良いところもあれば限界もある。多くの家庭が痛ましい状況にある。

ドン・ボスコが大切にしたい「家庭的な精神」を受け継いで、困難を抱える家庭と向き合うサレジオ人たちの日々の実践と想いを聞こう。

●取材・文／編集部



ゆるし、愛を学ぶ“家庭”

サレジオ会総長 アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父

家庭は人生のゆりかご

教皇フランシスコの使徒的勧告『愛のよろこび』にあわせて、2017年のサレジオ家族のテーマを「家庭・世界中の家族」とし、「わたしたちは家族! “家庭”は命と愛の学び舎」という標語を掲げました。

家庭は、すべての人の生活・人生にとって、なくてはならないものです。どの家庭にも不完全さがあります。それでも生身の家族の限界や欠点を乗り越えて、家庭こそが人生の最も美しく大切な現実であると認めなくてはなりません。

家庭は、人生のゆりかごであり、私たちが自分の翼で飛び立てるようになるまで、愛され、世話してもらい、守られ、支えられていることを実感する巣でした。家庭の中で私たちは絆と愛情の力を学びました。

限界を乗り越えて

ドン・ボスコは2歳になる前に父を失いました。マンマ・マルグリータのような類まれな母がいるという大きな恵みはありましたが、父のいない子として生きることが何を意味するかを彼は語っています。世界中の子どもたちにとって暖炉・避難所・巣である家庭の価値を認め、家庭の絆を大切にしましょう。家庭のありふれた日常の中で、私たちはあらゆる人間社会にある一致と不一致を体験し、コミュニケーション・理解・ゆるしの

術を習得できます。家庭において私たちはさまざまな限界を体験します。けれども、愛・信仰・自由・尊敬・正義・労働・誠実さのような本質的で貴重な価値についても体験し、それらは一人ひとりの人生に根をおろすのです。

家庭を元気づける“処方箋”

私たちが日々出会う家族に対して何ができるでしょうか。いくつかの“処方箋”が考えられます。

- 知り合いの家庭に、思いやりと共感をもって寄り添おう。
- 愛情と心を通して教育し成長できるように、家庭を助けよう。
- 人びとがいつでも温かく迎えられると感じる「開かれた家」になろう。
- 結婚の道を歩みたいという夢を抱く若者たちに同伴しよう。
- 人間的・道徳的・霊的価値を、恐れずに若者たちとその家族に示そう。彼らは、心の奥でその価値を探し求めています。
- 私たちが奉仕する家庭が、愛の「喜び」を生きるように支援しよう。
- 少女や女性に対する差別を根絶しよう。
- 身近な家庭の困難な状況を理解するために、共感ある姿勢をもとう。
- ドン・ボスコの事業発祥地ヴァルドッコの家庭的雰囲気は何度でも立ち帰ろう。

2017年2月 サレジオ家族へのメッセージより要約



2017年3月ポリアにて

ストレナ2017
「わたしたちは家族!」

YouTube動画

フェルナンデス総長の
ビデオメッセージも
ぜひご覧ください!



<https://youtu.be/rld5oKDY2cM>



困難な家庭に育ったドン・ボスコ

ドン・ボスコは2歳になる前に父を急病で失いました。母マルグリータと兄弟3人で働きますが、貧しい農家で学校に通えず、長男（父の先妻の子）と不仲であったこともあり、家族のもとを数年間離れて少年時代を過ごしました。やがて司祭になったドン・ボスコは、路上をさまよひ、傷つき、助けを必要とする少年たちのために生涯をかけて働こうと決意。身寄りのない貧しい少年たちの家始めた時、年老いた母マルグリータは少年たち皆の母“マンマ”となって最期まで彼を支えました。





運動会で全員集合

家族のように 共に生きる



児童養護施設
星美ホームでの取り組み
S E I B I H O M E

東京都北区赤羽にあるサレジオン・シスターズの児童養護施設「星美ホーム」。家庭にさまざまな事情があって入所している子どもたちの数は現在96人。その子どもたちに対応する約80人のスタッフは、星美ホームの理念でドン・ボスコの言う「通じる愛」を実践しようと、日々奔走している。

今年のストレンナ(サレジオ家族年間目標)に合わせて、特に家族的精神に力を入れているスタッフから、現代の家庭の問題、星美ホームでの実践、そして家庭や学校へのアドバイスなどを分かち合ってもらった。

●取材協力/社会福祉法人 扶助者聖母会 星美ホーム 熊本幸子シスター(園長)、吉田百合子シスター(副園長)、白川実香(ファミリーソーシャルワーカー)、平澤和彦(自立支援コーディネーター)、古澤雅史(主任)

入所する子どもたちの 家庭の問題は?

現在、施設に入所する子どもの6~7割が虐待を受けた子どもたちです。虐待を受けて、精神的にデリケートな子どもが増えてきました。多くが情緒不安定、発達障がいです。だから、今は特にそういう子たちの対応を専門的に学んでいます。

その背景に、精神疾患の親が多いことも指摘できます。精神疾患になる理由

は、親自身が子どもの頃に虐待を受けていたため、配偶者から家庭内暴力にあつたため、もともとそういう傾向があつたためなどさまざまです。知的障がい、養育能力が不足しているケースもあります。

子どもたちへの対応について、 難しさは?

反抗してくる子はまだいいのですが、そのエネルギーのない子の場合もつ

と難しいです。ひきこもりや不登校、人生において前向きに生きられないような子に対しては、非常に難しさを感じます。施設内では、昔に比べたら今は問題は少なくなってきています。かつては子どもたちに問題を起すエネルギーとか知恵があつたのだと思います。今はコミュニケーションが苦手な子どもが多く、ゲームとスマホがあれば満足で内向きになっています。

心身共に傷ついたり子どもたちが入所しています。みんな大人不信です。い



毎年、百名山に挑戦する。しかも海拔0mから、つまり海からスタートして登る。ピークまでに150km歩くことも。



クリスマス会での聖劇

ちばん愛してくれるはずの親から見捨てられたわけですから、大人は信頼できないということを体で覚えています。私たちにはその信頼を回復するという役目があるのではないかと考えています。再度育て直しが必要で、子どもたちに“愛されている”ということを感じさせることが、私たちの使命だと思っています。

具体的な接し方は?

ドン・ボスコが「子どもの好きなことを、先生は好きになりなさい」と言ったように、子どもの好きなことを一緒にやってみることがスタートです。子どもたちとたくさん話して、好きなものを知り、それを一緒にやったりすることから信頼



ロッククライミングにも挑戦



アカデミア(演芸会)の一コマ

関係ができると思います。

ほとんど家庭の生活のなかで普通の世話をされてきていない子どもたちですから、たとえば入所した子が中高生であっても、徹底的に世話をしあげます。「もう中学生でしょ、もう高校生でしょ」とは言いません。人間が自立するためには、依存する体験、愛されている体験を経なければなりません。彼らが「安心して甘えていいんだな。やってもらっていいんだな」と、せめてここにいる間だけでも感じて、卒園して行ってほしいと思います。

行事を大切にしていますね

行事は関係性を作る場なので、野外活動、運動会、アカデミア(演芸会)などを大切にしています。同じフィールドで、寝食共にするような場があると関係が近くなります。日常の中でトラブルがあつたとしても、非日常の中で職員に頼ったり、子どもたち同士で助け合ったりしてつながりを作ることができます。

一般の家庭や 学校へのメッセージを

子どもたちが何かをやってみたくいいうときに、まずやらせてみるというスタンスは大事です。「いいよ」とゆるしてもらった経験をすることで信頼関係ができます。もちろんダメと言わなければならないときもありますが、子どもの希望について、両親や先生がよく話し合っ、条件を付け過ぎずに一度やってごらんという懐の深い対応ができるといいと思います。子どもを先に信頼していないと許可を出すことはできません。ドン・ボスコの言う信頼関係というのは、まず親や先生が子どもたちを信頼して、それをやらせてみる。失敗したら、一緒に解決していくことだと思います。

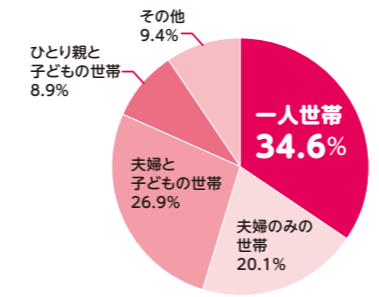
それから、ルールや規則ではなくて、関係性で人を育てていくということ。愛情をもって子どもたちに関わり信頼関係を作る。ドン・ボスコの言う、家族的精神というのは、血はつながってなくても家族のように信頼し合い、愛し合うというものだと思います。

実践を深めていくと愛情がすべてかなと思います。逆にいうと、愛さえあれば育てていくと。子どもを真剣に愛することができていけば、多少間違つたことがあつても、子どもは育てていくのかなと思います。

そして、子どもへの関わり方と同様に、一緒に働いている同僚やスタッフに、そういう気持ちで接することだと思います。ドン・ボスコの予防教育法を自分たちなりに他の言葉で言い表すと、対話、納得、一致となります。関わりの中で対話が第一歩です。対話のできる人になっていくためにどうしたらいいかをふりかえています。

日本の家族構成は “一人暮らし”が最多

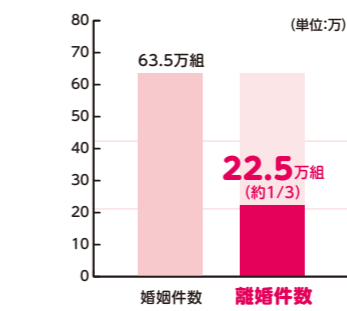
一人暮らし世帯が最も多く、孤立した人たちも急増中。3世代同居はごく少数で“家族”の姿は時代とともに様変わりしています。



総務省統計局「2015年 国勢調査」より

結婚生活の難しさ

離婚が珍しくない時代。離婚に至らなくても、多くの家庭が悩みを抱えて苦しんでいます。結婚に対する価値観も大きく変化しています。



厚生労働省「2015年 人口動態統計」より

人とつながる勇気をもつ強さを

臨床心理士 遠藤愛さん

追い詰められた親たち

“虐待する親はひどい鬼親だ”と捉える人がいますが、じつは子どもとの関わりに悩み追い詰められている親もいれば、その人自身もかつて親から虐待され心の傷が癒えないまま親になってしまった人もいます。追い詰められて虐待に走る一歩手前の状態の親は、世間でいわれているよりも多いのかもしれませんが。子どもとの関わり方がわからなかったり、子どもの行動が自分の価値観から外れてしまったりすると、どうしてよいかわからなくなってしまいます。虐待は決して特別なケースではなく、私たちも紙一重で同じ延長線上にいるのです。

他者となつがりにくい時代

かつて地域はコミュニティ（共同体）として成立し、家族はさほど閉鎖的でなく、もっとオープンでした。他人との距離感が今より近かったのだと思います。昔も虐待はありましたが、コミュニティを気にして親もなんとなく歯止めがかかり、ふと客観的になれる瞬間があったわけでした。

現代は核家族化が進み、個人の権利が主張できる時代になって、コミュニティの窮屈さから解放されたのかもしれませんが。しかし、“共に同じ地域で暮らす共同体”という意識が互いに希薄なので、他人の家に口を出すことが後ろめたくなってしまいました。虐待も、近隣でだれも気づいていなかったケースはほとんどなく、おかしいと感じていた人は結構いるのです。でも、一歩踏み出して関わるとなると、トラブルを恐れてやめてしまうのです。

密閉した家族の共依存の問題

現在は、家族以外の人との関係性が希薄になった反面、家族同士の距離感が過度に近くなり、家族内で依存しやすくなったともいえます。他人に心を開けない分、親は子どもを思い通りにしたり、子どもにさえ甘えてしまうのです。開いている窓が少ないために、開いているところだけに意識を向けてしまうのです。虐待の多くは、親が子どもを嫌って生じる問題ではありません。暴力で支配するのは、逆にいうと“近くにいるほしい”と依存しているのです。過剰な依存心を含んだ愛情、周りとの関係が築けないための“共依存”です。

“コミュニケーション”は我慢と調整

人と関わりやりとりをすることは本当に大変な作業です。我慢し、妥協し、いろいろな調整やコントロールが必要とします。そのような混沌とした中で希望が生まれ、耐えてよかったという喜びを得ていくものです。ところが現代はインターネット、SNS、スマホで事足りて、我慢して直接人と関わらなくとも、簡単に人とつながることのできる環境があります。一見楽ですが、周りの人の意見を聞き入れるのが難しくなってきたのも事実です。コミュニケーションは本来キャッチボールですが、ネットの世界では投げっぱなしの一方的な発信になりがちです。聞くこと、受けることは意外と大変です。

子育ても基本的に子どもの発信を受けとめなければなりません。よく聞いた上で判断して答えるのがコミュニケーションです。特に“聞く姿勢”を大事にしたいですね。

他者となつがる“窓”を開く

人は“だれかと関わりたい”、“自分の話を聞いてもらいたい”という気持ちがあります。それができる人を見つけないこと、その窓口を増やすことはとても大事です。どこが“開いた窓”になるかは人によって違いますが、探す必要はありません。

もし、ご自身が家族の中で行き詰まりを感じるのであれば、少し踏み出して家族とは違うコミュニティに参加してみることをお勧めします。逆に、周囲に心配な人がいる場合、勇気をもって少し声をかけてみましょう。最初は断られるかもしれませんが、毎回声をかけた結果、たった一度でも反応してくれたことが、関係をつくる第一歩になることもあります。面倒なことに関わらないようにと逃避するより、みんなが少しずつ一歩を踏み出すことで、何かが変化していくかもしれません。



えんどう あい
星美学園短期大学准教授として保育者養成、特別支援学校の教員養成にたずさわるとともに、臨床心理士として、さまざまな自治体の幼稚園・小中学校・高等学校の巡回相談を行っている。



夢と信念、
助け合う
開かれた家族

サレジオ会日本管区長 マリオ山野内倫昭神父

母セシリア美智子と一緒に、左からアンヘル公司神父（次男）、マリオ倫昭神父（長男）。2016年、カトリック浜松教会で。

YAMANOUCHI FAMILY

移住——家族の大きな冒険

両親は30代の時、私たち5人の息子を連れてアルゼンチンに移住しました。「アルゼンチンはカトリックの国だから」という理由です。子どもはすぐ友達ができ、遊ぶ原っぱもたくさんあるし、家の仕事を手伝ったりと、いい環境でした。ところが、人びとはあまり教会に行かないし、教育も熱心でなく、盗難も多い。他に日本人家族はなく、言葉もうまく話せず、想像を絶するような苦勞をしたと思います。アルゼンチンでさらに4人の息子が生まれ、10人目に娘が生まれましたが半年で他界しました。

大きな夢をもつ父

父レナート誠一は大きな夢をもつ人でした。たくさん子どもを産み育て、新しい土地に神を伝え広めるといふ夢です。父は悩み多い20代の時に教会に行くようになり、体調を崩して入院した病院のシスターの勧めでカトリックの洗礼を受けました。母も父の勧めで結婚する前に洗礼を受けました。夫婦で子どもさんの家庭を築き、一緒に聖書にある神の言葉に従って歩めば、道は開けると信じたのでした。無口で頑固な人でしたが、信仰・信念をしっかりとついで、移住した村の人たちから大事な仲間として受け入れられ、尊敬されました。



父レナート誠一と一緒に、左から次男のアンヘル公司（ひとし）、三男のフィデル良信、長男のマリオ倫昭。3人とも現在サレジオ会司祭。1964年、移住時のパスポート写真。

付き合い上手な母

母セシリア美智子は付き合い上手な人でした。両親が小さな食料品店を始めると、毎日村の人たちが訪れ、たくさんの友達ができました。裕福な家もあれば、貧しい家や物乞いをする人、複雑な事情を抱えた家庭もありましたが、皆が親しい仲間でした。母は貧しい人のために3度の食事を作り、毎週パンを10kg以上も焼いていました。逆に私たちが困った時や病院に行く時は、村の人たちが家族のように世話をしてくれました。

家族一緒に必死で祈る

私が12歳のある日、父が50km離れた街に荷物を届けるため自転車で出かけました。夜になって母と私が家の前の国道で父の帰りを待っていると、救急車が街に向かって走っていったので、母は「この人のために祈ろうね」と言って一緒に祈りました。しばらくすると村の警察署長が飛んで来て「お父さんが車にはねられて救急車で運ばれた」と。母は幼い弟たちのために家に残って、長男の私が街の病院に行くことになりました。村の警察署で彼らの手料理を食べさせてくれて、バスで街に到着したのは深夜でした。バス停では街のサレジオ会の院長と村出身の神父様が待っていてくれました。父は数日間意識がありませんでしたが徐々に回復し、私はサレジオ会の学校の食堂で食事を世話してもらいながら、約3週間病院に寝泊まりして看病しました。父はこの入院で深刻な糖尿病であることもわかりました。当時まだ母は30代、5人の子どもを抱えてこの先どうやって生きていけばよいのか、すべておしまい、日本に帰ろうかと落ち込みましたが、子どもたちと一緒にひざまずいて聖母マリアにロザリオの祈りを唱え終わると、母は「もう大丈夫」と。前向きになった母を見て、子どもたちも安心しました。母は父がしていた



父レナート誠一と母セシリア美智子。1987年、アルゼンチンのコルドバで、アンヘル公司とフィデル良信の司祭叙階の時。



母を囲む山野内9人兄弟。2004年、父の追悼ミサのためアルゼンチンのサンホアンに集う。

街への行商も始めました。

神が家族を導いてくださる

私がサレジオ会の神学校に入り、休暇で帰省した時のこと、母は20歳を過ぎた私に、家庭生活の苦しさを話してくれました。たくさん子どもを抱え、言葉に不自由し、電気もなく、生活も商売も苦しく、夫に辛いと相談しても取り合ってもらえず、子育ての考え方も一致しない。もう夫と別れたほうが良いと考えたこともあったと。でも夫を信じたのは、夫が神を信じる人だったからだ。たとえば夫が間違ったとしても、神様はこの家族を正しく導いてくださると母は確信していました。

マンマ・マルゲリータのように

2004年に父が他界し、母は翌年ドン・ボスコの母マルゲリータのように第2の故郷を出て、息子たちが働く日本へ再びやって来ました。浜松で滞日外国人のために働いて多忙な比嘉エヴァリスト神父（2016年ブラジルに帰国）と山野内アンヘル神父の身の回りのことを助け、教会に来る外国人たちの話を母のように親身になって聞いています。

9人の息子たちは今、3人がサレジオ会の神父として働き（うち2人は日本で、1人はアルゼンチンで）、3人が地元サンホアンで山野内家の植木屋を継ぎ、3人がアルゼンチン各地で暮らしています。皆、夢をもつ父と、付き合い上手な母の影響を受けているようです。

まりお やまのうち みちあき

1955年大分県佐伯市生まれ、61歳。8歳の時、家族とアルゼンチンへ移住。29歳で司祭叙階。アルゼンチンの哲学院で哲学・社会学などを教え、司牧担当・院長・アルゼンチンとパラグアイ6管区の修練長を経て、1997年（41歳）帰国。日本のサレジオ会員として働く決意をする。育英高専・杉並支部院長、調布サレジオ神学院院長、副管区長・サレジオ家族担当・養成担当を務め、2014年12月より日本管区長。趣味はギター演奏。

連載インタビュー
**ドン・ボスコの
 教え子たち**
 今、様々な分野で活躍している
 サレジオな同窓生を紹介します。

●取材・文／編集部



株式会社クラチ 代表取締役社長

くらち つねひさ
 1954年、横浜市生まれ。横浜市立大学卒業後、横浜銀行に奉職し、現在、株式会社クラチ代表取締役社長として地元横浜にて青果業・割烹料理店・ドトールコーヒーFC店舗(15店)を経営。横浜西ロータリークラブ会長も歴任。サレジオ学院同窓会会長を務める。

We are DB's Students **倉知 恒久さん**

サレジオ歴／サレジオ学院中学校・高等学校(旧目黒サレジオ中学校・旧サレジオ高等学校)OB

横浜駅ダイヤモンド地下街のかつての焼きそば屋は、今ドトールコーヒーに。そこに至るまでには時代の読み、人との関わり、そして決断があった。横浜駅周辺で飲食業を展開する株式会社クラチ社長・倉知恒久さんに話を伺った。

として認められて目黒区の大会に出られました。高校でもサッカーを続け、高2の時にはキャプテンを務めました。

サレジオに入るきっかけは？ サレジオでの思い出は？

二つ年上の兄が目黒サレジオ中学校(川崎に移転し、現在は横浜にあるサレジオ学院)に通っていました。もともと実家はキリスト教とは無縁なのですが、カトリックの教育を受けさせたいという思いが両親にあったのかもしれない。兄がとても楽しそうだったのを見て、私も自然に通うようになりました。

残念ながら兄は中3の1学期に病気で亡くなってしまったので、兄と一緒に通ったのは3か月だけです。兄の追悼式を碑文谷のサレジオ教会でいただきました。兄の遺影はサレジオの制服です。

学校では朝礼前と昼休みに、生徒はグラウンドに出て、神父さんや先生たちと一緒にサッカーをするのが日課でした。夏休みは学校の先生という時間のほうが、家族よりも長いくらいでした。臨海学校、林間学校がありました。それから担任であった高橋征二先生には、個人的にも山へ連れて行ってもらいました。思い出するのは、全校の校外授業で伊豆大島に行ったことです。中1でいきなり夜の東京の竹芝桟橋に集合。船の中で雑魚寝して、朝、島に着いてから散策をし、また船で帰ってきました。今考えるとよく親が行かせたし、先生たちもよくやっていたなと思います(笑)。

部活はサッカー部です。最初は同好会でしたが、中3の時に部

現在の仕事について教えてください

父は青果業と料理屋をしていました。当時有名だったのが、横浜駅のダイヤモンド地下街(現・相鉄ジョイナス)にあった焼きそば・スナック「クラチ」という店です。青果業ですから、野菜をたくさん使った焼きそばをやっていました。学生が学校の帰りに1杯100円以下で焼きそばを食べていました。テイクアウトもできて、ファーストフードの走りみたいなものでした。

いつか家業を継ごうという思いもあって、私は横浜市立大学商学部に行きました。卒業して横浜銀行に就職し10年間働きました。銀行での経験は今の仕事には生きていて、地元での人脈づくりで助かっています。

今の私の事業の中ではドトールコーヒー(以下ドトール)が売上規模として圧倒的に大きいのですが、これは銀行での出会いから始まったものです。銀行で働いて3店目に着任したのは八重洲にあった東京支店です。その支店の近くに、当時はまだあまり知られていなかったドトールコーヒーがありました。少しずつドトールの店舗が増えてきた時期です。朝、仕事の前に1杯150円のコーヒーを飲み、昼食でも使っていました。そのうち横浜銀行と取引をさせていただこう



横浜駅西口地下街にあるドトールコーヒーショップ横浜ジョイナス店の前で。

本店を訪ねました。何度か話をしに通っていると、「横浜でどこか物件を紹介してくれたら、取引しましょう」ということになりました。ドトールは横浜にまだ店舗がなかったのです。ちょうどその頃、父がやっていた焼きそば店は、マクドナルドなどのファーストフードやインスタント食品に押され始めていました。そこでコーヒーが好きだった父をドトールに連れて行き「こういう店を、横浜でやってみないか」というと、父は「是非やろう」と。それで話がトントン拍子に進んで、横浜での1号店がダイヤモンド地下街にオープンしたのです。昭和61年(1986年)12月で、私は32歳でした。

その半年後に、私は銀行を辞めることになりました。というのは、父の片腕として経理をしていた叔父が心筋梗塞で急死して、経理をやる人がいなくなり、父から「帰ってこい」といわれたからです。こうして私は父の仕事を引き継ぐことになりましたが、自分で何

「共にいる」という教育方針にはとても共鳴します。

か新しいことをしたいという思いもありました。そこで、横浜でのドトールの店舗の数を増やしていきました。当時、フランチャイズシステムはいくつか出てきていて、海外からのものもありましたが、日本オリジナルのドトールは異色で、商店街の本屋や八百屋などに転業を勧めていく業態としては先駆的でした。

コーヒーは、かつては喫茶店で1杯400円以上する高級な飲み物で、敷居が高いイメージでした。ドトールのコンセプトは、おいしいコーヒーを単価を安くしてたくさんの人に飲んでいただきたいというものでした。さらにコーヒーだけを売ってではなく、ちょっとおしゃれな感覚を大事にして、やすらぎと活力、空間を提供するという基本的な考えがあり、それに共鳴しました。ドトールにお客さまが来る目的はたくさんあると思います。うれしいから来る人、疲れている人、仕事や生活で悩んでいる人もいるかもしれません。いろんな人たちが、コーヒーを飲んで帰るときにはちょっと元気になってくれたらと思う、がんばって店を作って今日に至っています。ドトール創業のオーナーと一緒に自分たちで開拓して店を展開してきたという思いはあります。今、ドトールコーヒーの店舗は横浜エリアに当社の経営の下で15店舗あります。

それから父が他に割烹料理屋をしていましたが、割烹料理業態の難しい時代の流れの中で、本業の青果業を強みとして、野菜料理を中心とする和食料理店に変えました。

仕事において大切にされていることは？

ビジネスとして経営を成り立たせるということは当然ですが、それに加えて地域の皆さんに喜んでいただくことは、とても大事だと思います。当時は新しくドトールを1店舗作るたびに「この辺りもちょっと都会になった」と近隣の方々に喜ばれました(笑)。

それから、現在、当社の従業員はアルバイトを含めると250名くらいで、社員は約30名です。人材育成というのがいけば悩むところですが、最終的にこの「人づくり」がいちばん大切だと

思います。サレジオが大事にしているアッシステンツァ「共にいる」という教育方針にはとても共鳴します。従業員の話、悩みを聞いてあげ



るといこと、すべてに答えられるとは思いませんが、とりあえず社長はわかってくれているところ当社のベースにあるとしたら、それはサレジオ時代に学んだ人との関わり方が生かされているのではないかと思います。

若い人たちへのメッセージを

大きな意味での未来というのは自分の力では変えられません。でも自分の未来というのは努力次第で変えられます。たとえば期末試験があるから、それまでの時間どう勉強するかで未来は変わります。だから、より良い未来になるように、努力を惜しまないでほしいです。明日から頑張ろうと言っても、明日を変えるためには今日できることをしっかりやるのが大切です。今日から始めてみよう。

それから、失敗を恐れず、勇気をもってチャレンジしてほしいということ。長い人生において失敗は何度も経験します。リスクもあります。けれど、失敗を恐れて何もしないよりは、思い切って挑戦した経験の中に希望の光、成功の鍵がきっと見つかるはずですよ。



旬菜やくらち
 横浜鶴屋町で創業50年を超える老舗。名物「野菜おでん」をはじめ旬の野菜本来のおいしさを堪能できる懷石料理をくつろぎの個室でいただける。

横浜駅きた西口 徒歩2分
 横浜市神奈川区鶴屋町2-13-2
 横浜スクエアビル1F
 TEL 045-311-9494



サレジオ学院中学校・高等学校
 神奈川県横浜市都筑区南山田 3-43-1
 www.salesio-gakuin.ed.jp



サレジオ家族が関わりをもつ
世界そして日本の風景を紹介します。



ウランバートルのオルビトにあるオラトリオ（青少年司牧の場）の子どもたち。サレジオ・シスターズはオルビトで幼稚園、小学校、小さな図書館、オラトリオを運営している。上の写真中央は、サレジオ・シスターズ宣教女の小島華子シスター。



Ulaanbaatar Mongolia

ウランバートル／モンゴル国
公用語：モンゴル語

モンゴル国は東アジア北部の内陸国。草原がイメージされるが90%で砂漠化が進んでいる。首都ウランバートルは標高1,300mにあり、国の人口300万人のうち約半数が暮らす。1992年に民主化した。国民の半数近くが1日2ドル未満で暮らす貧困層。サレジオ会は2000年から、サレジオ・シスターズは2007年から宣教師を派遣し、教会・教育・出版事業を展開。教会外での宗教活動は禁じられ、宗教への警戒心は強いが、ドン・ボスコの教育スタイルは地域の人びとに親しまれつつある。



世界そして日本のサレジアンな人たちを紹介します。



—:自転車実走ルート
諸事情による他の交通手段
—:自動車 —:飛行機



ヤコブ・シュタインクルさん

Jakob Steinkuhl



エルネスト・ロイグ・カンピさん

Ernest Roig Campi

ドイツ管区 ドイツ・ケルン
Cologne, Germany

“Pedal for Humanity”

困難を抱える子どもたちのために走った1万5千km

2016年4月から2017年5月の13か月間にわたって、2人のドイツ人青年がドイツ・ケルンからベトナム・ブンタウまで1万5千kmを自転車で走破した。情熱と“Pedal for Humanity”（人類のためのペダル）のビジョンを抱いて、ドイツ、オーストリア、クロアチア、アルバニア、ギリシャ、トルコ、ジョージア、アルメニア、イラン、インド、ネパール、ミャンマー、タイ、カンボジアを通り、ついにベトナムのサレジオ会管区長館にたどり着いた。



人類、そしてドン・ボスコのために ペダルをこいで

ヤコブ・シュタインクルさんとエルネスト・ロイグ・カンピさんの2人は看護師。ヤコブさんは東ティモールのドン・ボスコの家（孤児院）でボランティアとして1年間働き、サレジオ会の働きに共感しました。2人はDon Bosco Straßenkinder（ドン・ボスコ・ストリート・チルドレン）のために寄付を募りながら、各地でドン・ボスコの家に立ち寄ろうと自転車の旅を計画。イスタンブールのドン・ボスコ・センターでは難民の人びとと出会い、不安や希望を語る子どもたちの現状に心を揺さぶられました。2人は困難を抱える子どもや若者を支援するために寄付を呼びかけ、寄せられた3,100ユーロは世界各地にあるストリートチルドレンのためのドン・ボスコの家で役立てられます。

以下、ドイツ・ボンの

ドン・ボスコ・ミッションオフィスによるインタビューから

——人びととの出会いで特に心に残ったのは？

ヤコブ 私たちは毎日、いろいろな人生を歩む人と出会いました。食べ物をくれたり、泊めてくれたりした人にいちばん感動しました。その人たちは、こちらが頼まないうちから私たちの必要に気づき、広い心で受け入れてくれました。その気取らなくて、ごく自然な歓迎は、圧倒的な美しさでした！

——心理的な限界を感じたことは？

ヤコブ はじめは、車の多さがものすごく心理的な負担でした。トラックやバスがフルスピードで走るので、集中力と勇気をふりしぼらなければなりませんでした。テヘランでは、いろいろなピザ

の申請が大変でした。ネパールでは、道路事情と山（峠は海拔3,200m）のおかげで体力的にも精神的にも限界でした。

——旅での自分たちの変化は？ 将来の計画は？

ヤコブ 確実に変わりました。今すぐにたくさんすることはできませんが、この旅で経験したことをいつかきっと役立てられるはず。持っているものを以前よりも感謝するようになりました。私は怒りやイライラの感情を楽に手放せるようになって、以前のようにため込んだりしなくなりました。2人とも、今後も医療分野で働いて、もっと成長したいです。旅した多くの国の貧困と医療のニーズを知って、私たちは奮い立ちました。将来はヨーロッパの境界を越えて、自分たちの専門分野を活かして支援したり、人を育成したりできればと考えています。

——2人の友情にとってこの旅の意義は？

ヤコブ 旅の前から私たちは親友でした。たくさんの体験や長い時間を共に過ごしたことで、友情はもっと深まりました。この友情がなければ、間違いなく最後までがんばれなかったでしょうね。私たちは仕事の事情でこれから4年半近く別々の道を歩みます。エルネストは集中治療と麻酔士としての訓練の道に進み、私は医学を学びます。私たちの友情はいつまでも変わりません！ 教会で唱える「アーメン」と同じくらい確かですよ！

News source

“BoscoLink” 2017年7月5日記事より

「BoscoLink」は東アジア・オセアニア（EAO）地域のサレジオ家族ニュースサイト。毎日EAO各地のサレジオ関連ニュースが英語で紹介されています。http://www.bosco.link





イタリア

共同体「みんなの夢」は少年たちの家庭に

News Source: ANS



家庭共同体「みんなの夢」の若者と同居生たち

「みんなの夢」と名付けられた家庭共同体がイタリアのナポリに誕生したのは、2006年12月。「ドン・ボスコだったらそうしたくない」という方法で、最も貧しい少年たちのニーズに応えようとしてオープン。10年の間に数百人の少年たちが、

家庭、雨露をしのぐ屋根、差し伸べられた手、父の心、人生の新たな展望を、サレジオ会が運営するこの共同体で見いだしてきた。

クリスティアンは共同体に来て2年。来た時は新しい環境にあっけにとられたが、今はわが家と感じている。この共同体の寮で彼は友情の意味を学んだ。今はパン菓子職人になる夢を抱いている。

ヴィットリオは来てまだ5か月。音楽と歌うことが大好きで、ピザ職人になるのが夢。この家に来て寝る場所を得ただけでなく、大切な教訓も学んだ。「この世で一つだけ変えられたいなら、何を变えたい?」と質問されると、彼は即座に「自分!」と答えた。

モンテネグロ

「ボスコ・サーカス」ジャグラー集団の演技

News Source: ANS



ジャグリングを披露する「ボスコ・サーカス」のメンバー

2017年4月、ヨーロッパ・バルカン半島の国モンテネグロの首都ポドゴリツァで、地元のサレジオ・ユースセンターの「ボスコ・サーカス」ジャグラー集団が、同市最大のショッピングセ

ンターで好奇心いっぱいに見守る買い物客の前でパフォーマンスを行った。グループの若いリーダー、リンドン・リュコヴィッチはサレジオ・オラトリオの生え抜き。グループは3年前から活動を始めた。所属する子ども・若者の中にはカトリック信者だけでなく、正教会信者やイスラム教徒の若者もいる。

グループの目標は自分たちや観客が楽しむだけでなく、遊びを通して人間の価値、人との絆、責任感を学ぶこと。ポドゴリツァのサレジオ・センターのほかのグループと同じく、ドン・ボスコの予防教育法が掲げる価値を促進する。ドン・ボスコの名は、バルカン半島諸国の多言語・多民族の社会ですます知られるようになっていく。

スペイン

第28回国際サレジオ・ユース・スポーツ大会開催

News Source: ANS



サレジオ・ユース・スポーツ大会の開会イベント

2017年5月10～15日、第28回サレジオ・ユース・スポーツ大会がスペインのセビリアで開催された。今回、大会の組織運営を担ったのは、セビリア管区のサレジオ・シスターズ。ヨーロッパ12か国のサレジオ事業の1,400人以上の若者に、レバノンからの代表団も加わり、バスケットボール、フットサル、テニス、バレーボールの競技に参加した。

エルサルバドル

700人以上の子どもたちの食事支援

News Source: ANS



ポリゴノ・ドン・ボスコ・センターで食事をする子どもたち

食べていない子ども・若者は勉強することができない。学校で勉強し、活動するために最も重要な、基本的な食事は朝食だ。しかし、エルサルバドルでは、多くの子どもが朝食をとらなからそうしているわけではない。それは子どもたちの置かれた貧困の現実であり、その結果、学びたいという意欲も絶たれる。「ポリゴノ・ドン・ボスコ」で働くサレジオ会員は、700人余りの子どもたちに毎日3度の

食事を提供している。

エルサルバドルでは、人口の35%が極端な貧困状態にある。暴力が蔓延し、生活向上の機会や基本的な社会インフラもほとんど手に入らない。

ポリゴノ・ドン・ボスコ・センターは、サン・サルバドルの最も貧しい地区にあり、教育を通して貧困の原因に働きかけようとしている。現在700人の生徒、幼稚園から高校、職業訓練校までの学校で学ぶ青少年たちを支援している。

「多くの子どもが何も食べずに学校に来ていることに私たちは気づきました。朝食だけではありません。子どもたちの多くは、夕食にも何も食べるものがないのです。お腹を空かしたまま眠りについていました。そのような状態では、誰でも集中するのは難しくなります。そこで、食事プログラムによる支援を始めたのです。子どもや若者の未来を変えることは、毎日食べることから始まります。」

ヨーロッパ

移民・難民の若者を支援

News Source: Don Bosco Aujourd'hui



職業訓練センターで学ぶ移民の若者

ヨーロッパ、世界各地のドン・ボスコ社会支援活動は、多くの移民の子ども・若者を迎え、受け入れ国で元気に生活できるよう助けている。

移民となった人生の道のりで、サレジオ会と出会った若者たちがいる。現在ドイツに暮らすガーナ出身のアミーネもその一人。彼はスペインでドン・ボスコ基金に受け入れられ、2人の修道者とサレジオ・ニコオベ

ラトリー会員を含む何人もの教育者が彼と共に歩んだ。アミーネはふり返る。「心が回復しました。イスラム教徒の自分にクリスチャンの人たちがしてくれたことを僕は忘れられません。共にいるのは喜びでした。同じ神様を信じている、兄弟愛について同じように強く信じていると聞きました。そのおかげで、旅の間に経験したたくさんの苦しみした後で、本当に再び立ち上げられるようになりました。」

サレジオ会是世界中で、移民・難民のための事業を数多く行っている。フランスのグラディニャン・ドン・ボスコ高校の更生・職業訓練センター(CRFP)は、未成年の移民を受け入れるドン・ボスコ社会活動ネットワークに参加する団体の一つ。センターの生徒90人のうち、30人の移民を受け入れている。



DBK[ドン・ボスコ基金]は、特に助けが必要な青少年の保護育成を支援する、サレジオの基金です。

サレジオ会の創立者ドン・ボスコの精神を受け継ぎ、貧困・家庭問題・災害等により、特に助けを必要とする青少年を保護育成する国内外のプロジェクトを支援しています。

DBKウェブサイト

<http://salesians.jp/about/dbk>

機関誌「DBKだより」バックナンバーもご覧いただけます。



DBK [ドン・ボスコ基金] では、ボリビア、モンゴル、南スーダン、日本国内など、世界各国のサレジオ関係グループによる青少年の保護育成プロジェクト等を支援しています。ご寄付くださる方は、下記の振込口座まで(または本誌とじ込みの払込用紙にて) お振り込みください。

郵便振替口座番号: 00190-5-292253

加入者名: ドン・ボスコ基金

※通信欄の寄付意向にチェックを入れて、寄付金額をご明記ください。寄付者氏名の非公表をご希望の方は、払込用紙に「匿名希望」(☑チェックマーク) をご記入ください。

ベトナム

障がいのある人の家 ドン・ボスコ・シェルター

サレジオ会
春山ミカエルラップ神父



ドン・ボスコ・シェルターでアクセサリーの製作

ベトナム北部のタイビン省にあるドン・ボスコ・シェルター(生活の場・家)は、生まれつき障がいのある方と事故や病気などで障がい者となり歩んでいる方が利用する施設です。日本のような福祉支援がないため、行き場を失い、社会から排除されている人も少なくありません。

彼らがこのシェルターに来て、自分のできる作業によって手に職をもち、働くことで誰かのために生きる喜びを感じてくれるよう願っています。

今、必要な物は「車椅子」です。足に障がいのある人は、手作業の仕事を得て働いています。ビーズを使ってプレスレットなどアクセサリーを作る仕事をしている人もいます。しかし、足が不自由なのでトイレに行くことや少しの移動さえもだれかの手を借りなければならず、いつも周りの人に対して自分の存在を申し訳ないと感じてしまう状況に陥ってしまいます。そんな彼らのために車椅子があれば、周りに遠慮せず自分でできることが増えると思います。私たちが当たり前に行っていることさえも、彼らはできる喜びを感じられます。どうか彼らのために温かいご支援をお願いいたします。

インド

貧しい青少年の学校と 宣教センターのプロジェクト

サレジオ会コルカタ管区長
ニルモル・ゴメス神父



屋根のないダイヤモンド・ハーバー宣教センター

インドには現在11管区があり、コルカタ管区は最も古い管区です。インドの公立学校が地元の特権階級の青少年に英語による高等教育を行うことを主眼としているのに対し、サレジオ会の学校は地元の言葉を

使い、貧しく恵まれない子どもたちのために教育を行っています。

コルカタから北へ120kmの所に、私たちの最も古い宣教拠点クリシュナガル宣教センターがあり、地元の言葉を使って教育する中学校と農場、技術学校、宿舎があります。その建物の改装、家具の購入、小さな子ども用の公園の造成、学校の事務所開設を早急に行う必要があります。また、ベンガル湾沿いには最も貧しい人びとが多く暮らしており、私たちは10年ほど前からそこでダイヤモンド・ハーバー宣教センターを始め、たくさんの人びとが集まっています。この地域にコミュニティセンターを建設し、日曜には人びとを集めてミサをささげ、平日には教育を受けていない大人のための成人教育の場として、また村の子どもたちの教育センターとして活用したいと計画しています。

日本

慈しみの家 「ハッピーハウス」 食糧支援のお願い

サレジオ・シスターズ
VIDES JAPAN代表
シスター稲川孝子



ハッピーハウスで過ごす子どもとボランティアの若者たち

今日の日本社会には「貧困家庭の子どもたち」の中に「居場所」が無く、「食生活」においても発育年齢に必要な食事が十

分に摂れない状況の子どもたちがいます。慈しみの家(通称:ハッピーハウス)は、このような子どもたちや若者たちが心身ともに安心して、ゆくり自由に過ごすことができる場所を提供し、話を聞く・受け止める・遊び・語り合い・食事作り・食事を一緒にすることを活動内容に、若者が活動の中心となることを目標として設立しました。現在、小学3年生の女子2人、小学5年生の男子1人、小学6年生の男子1人が参加しています。離婚家庭の子ども、母子家庭の子ども、子育てで忙しい母親のストレスを少しでも助けることでハッピーハウスを利用する方々がいらっしやいます。毎週火曜と木曜の2日間ですが、遊び、宿題をさせ、夕食準備をし、一緒に夕食をいただきます。毎週、子どもと母親、ボランティアスタッフを入れて、10~12人の食事作りをしています。成長盛りの子どもの栄養と健康のために、皆様の支援を活用させていただきます。



善良なキリスト者、誠実な社会人として生きる

○ ドン・ボスコを支え動く信徒たち

サレジアニ・コオペラトリーは、サレジオ会やサレジアン・シスターズの霊的支えを受けながら協働者として生きるカトリック信徒の会です。1876年、「善良なキリスト者、誠実な社会人」の会としてドン・ボスコにより創立されました。

ドン・ボスコが貧しい若者のためにオラトリオ（学び・祈り・共に生活する場）の事業を始めるたびに、敬虔で熱心な信徒や司祭が手伝いにきました。夜間学校を手伝ったり、カテキズム（教会の教え）を教えたり、元受刑者たちに仕事を探してくれる人や、貧しい少年たちの身だしなみやベッドの世話をしてくれる人、経済的援助をしてくれる人もいました。そのおかげで、非行寸前だった若者にも豊かな実りが現れてきたのです。「協働者は、いつも神のみ摂理が私たちに任せた事業の支えとなってくれた」とドン・ボスコは記しています（『完訳ドン・ボスコ伝』p421～426参照）。サレジオ会とともに「社

会の中のサレジアン」として生きるサレジアニ・コオペラトリーの働きによって、ドン・ボスコの事業は世界に大きく広がって浸透していったのです。

○ 特に若者のために活動

現在、世界5大陸80か国で3万人の会員が活動し、日本では東京・静岡・三重・大阪・福岡・大分・宮崎・長崎に11支部と名古屋など3地区で約150人の会員がいます。

各支部は月1回の定例会をもち、サレジオ会やサレジアン・シスターズの指導のもと、カトリック信徒・サレジオ家族としての養成を受けます。会員はそれぞれの社会生活を営み、家庭生活を大切にしながら、生涯を通して自己の養成に励み、地域社会・家庭・職場・教会など、各自が与えられた場で活動します。特に弱い立場の人や青少年に関心をもって、その育成に関わる活動をしています。例えば、青年ボランティアグループ

の活動を後方支援する会員もいれば、東日本大震災以来、被災地の若者の支援を継続しているグループもあります。

○ 学校教育現場での活動

静岡サレジオ幼稚園・小学校・中学校・高等学校（学校法人星美学園、静岡県静岡市）はサレジアン・シスターズが設立母体ですが、十数人のサレジアニ・コオペラトリー会員が教職員として勤めています。カトリック・ミッションスクールとして、またドン・ボスコの教育法を実践する学校として、「いのちの与え主である神の愛のうちに、正しい価値観・人生観をもった誠実な社会人を育成する」使命を果たすことができるように、他の教職員の皆さんと共に学びながら働いています。フィリピンやオーストラリアにあるサレジオ姉妹校との交流や、ボランティアグループ VIDESジュニアのサポートなど、生徒のボランティア活動が活発なのも静岡サレジオの特徴です。



Visit the Salesian Family

サレジアニ・コオペラトリー

Associazione Salesiani Cooperatori (ASC)

○ 東アジア・オセアニア地域大会を東京で開催

2017年5月7～10日、第9回サレジアニ・コオペラトリー東アジア・オセアニア (EAO) 地域大会が東京都新宿区の京王プラザホテルで開催され、13か国から約330人が集まりました。今回の大会のテーマは「集まろう、若者のために」で、13か国から70人以上の若者たちも参加して「若者の集い Youth Meeting」が開催されました。(p.20～21記事参照)

大会では、実践事例の学び、今後3年間の行動計画の検討（特に養成と若者のために働くこと）のほか、文化交流のタベ、6か国27人の新会員入会式も行われ、サレジオの家族的雰囲気の中、大きな喜びを分かち合う実り多い4日間となりました。

今大会の実現のためにご支援くださった多くの皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

サレジアニ・コオペラトリー

Associazione Salesiani Cooperatori (ASC)



世界5大陸80か国で3万人の会員が、サレジオ会やサレジアン・シスターズと共にカトリック信徒協働者として活動。日本では11支部（赤羽・目黒・調布サレジオ・調布深代寺・静岡・大阪・四日市・北九州・宮崎・別府・長崎）と3地区（名古屋・日田・香川）で約150人の会員が活動しています。

お問い合わせ先: ascgia@salesians.jp
ローマ総本部ウェブサイト
www.asscc-mondiale.org

1	2	3	4
	5	6	
	7	8	

- 2014年、ドン・ボスコゆかりの地巡礼ツアーで、ドン・ボスコが幼少期を過ごした家「カゼッタ」を訪問。
- 若者たちの笑顔のために! SYMサレジオ青年夜間巡礼(2015年)では、おいしいご飯をたくさん作ってお迎えました。
- 2016年、長崎で行われた九州地区の黙想会で、サレジアニ・コオペラトリー顧問司祭のロロピアナ神父を囲んで。
- 2016年、カトリック別府教会を訪問したEAO地域顧問クレメンテ神父を囲む、別府支部のメンバーとブッポ神父。
- 2015年ドン・ボスコ生誕200周年にあたって、調布サレジオ支部では岡道信神父を囲んで共に祈り、学び、祝うひと時を過ごしました。
- 2016年、静岡サレジオを訪問したEAO地域顧問クレメンテ神父を囲む、静岡支部のメンバー。
- 2016年、EAO大会準備のため来日したEAO地域評議員のフィリップ・ユー氏（前列左端）と東京・四谷のサレジオ会日本管区本部にて。
- 2017年、EAO大会で入会した6か国27人の新会員と世界評議会メンバー。東京・カトリック調布教会にて。

ASC-EAO

Associazione Salesiani Cooperatori EAST-ASIA OCEANIA

CONGRESS in Tokyo

サレリアニ・コオペラトリー
東アジア・オセアニアEAO地域大会 in 東京

“集まろう、若者のために”

2017年5月7～10日、東京・新宿の京王プラザホテルで第9回サレリアニ・コオペラトリー東アジア・オセアニア (EAO) 地域大会が開催されました。13か国から約330人が一堂に会し、「集まろう、若者のために」をテーマに様々なプログラムが行われました。



大会は日曜日のミサで開幕。広い会場も13か国・約330人の参加者で埋め尽くされました。言葉は英語と日本語から、中国語・ベトナム語・韓国語など各国語に同時通訳されます。



参加メンバーは、東ティモール、フィリピン、ミャンマー、ベトナム、韓国、中国、香港、台湾、モンゴル、タイ、シンガポール、イタリア、そして日本の13か国から70人以上。SYM ASIA誕生!?

EAO

EAST-ASIA OCEANIA

Youth Meeting

in Tokyo

東アジア・オセアニアEAO地域 若者の集い

サレリアニ・コオペラトリーEAO大会には、13か国から70人以上の若者たちが参加し、5月7日・8日夜の2日間「Youth Meeting 若者の集い」を開催。共に歌い・踊り・祈る夜のひと時を満喫しました!



大会2日目はミサ、各管区の紹介クイズで開始。若者のための活動事例として、養護施設、シェルター、海外ボランティア、SYMサレジオ青年運動について講演やパネルディスカッションが行われました。



管区ごとのグループに分かれ、若者のために何ができるかをディスカッション。その結果発表では、若者たちが積極的に発言や分かち合いをしました。



開会ミサは駐日教皇大使ジョセフ・フェノットゥス大司教(中央)と30人のサレジオ会司祭が司式。写真右は世界評議会代表(顧問司祭)ジュゼッペ・カスティ神父、左は日本管区代表のアキレ・ロロピアナ神父。



まずはお互いを知り合おうということで、ゲーム形式での自己紹介タイム。



2015年夏、世界中からイタリアに5千人以上のサレジオ青年が集まって開催されたイベント「SYM Don Bosco 2015」でも踊ったダンスを全員で。会場が温まってきました!



各国が交互に、自国の紹介や歌やダンスの出し物を披露。日本のサレジオ神学生によるダンスに会場が沸いています。



調布教会から6台のバスで富士山へ出発。サレリアニ・シスターズ山中修道院で昼食後、富士山2合目の「富士の聖母」を巡礼し、皆でアヴェ・マリアを歌った体験は忘れがたい思い出となりました。



3日目の夜は、最後の晩餐と文化交流の夕べ。参加国のお国柄を反映したダンスや歌が大会に彩りを添えました。写真はフィリピン管区グループによる各地の民族衣装をまとったダンスと歌。



大会3日目はカトリック調布教会でミサが行われ、6か国27人の新会員がサレリアニ・コオペラトリーに入会しました。ミサ後、チャムッティ神父の墓前で祈りを捧げ、チャムッティ資料館を見学する人もいました。



青年たちは、サレジオの教会信徒や学校の同窓生、親がコオペラトリー会員で誘われて……など、参加したきっかけも様々です。写真は韓国の青年たちによるダンス。



中国・香港・台湾の青年たち。中国から日本に留学で来ているサレジオ青年もいて、これからのつながりも楽しみです。



2日目は、小グループで分かち合いの時間。各自のサレジオとの関わり、将来の夢、EAO大会で感じたことを語り合いました。



4日目は各管区が今後3年間の行動計画を発表。同時開催されたYouth Meetingについて青年代表が分かち合い、閉幕ミサで4日間の大きな喜びと実りを感謝。写真は世界評議会メンバーと山野内管区長、丸山和美コーディネーター(当時、後列左端)。



ドン・ボスコの仲間として出会えたことに感謝、サレジオ青年として喜びをもって生きていきたい……感謝と願いを、祈りとして捧げました。



Youth Meeting参加メンバーの喜び、感謝、願い、祈り、夢などを寄せ書きにして、「We are FAMILY!」(2017年サレジオ家族年間目標)のポスターを完成させました!

次回の
サレリアニ・コオペラトリーEAO大会は、
2020年、ベトナムで開催決定!

第1回はサレジオン・シスターズ修学院(赤羽)～イエスのカリタス修道女会日本管区本部(杉並)～サレジオ神学院(調布)、第2回は神学院～目黒星美学園中高(世田谷)～カトリック碑文谷教会(目黒)と、都内のサレジオ家族ゆかりの地を徒歩で巡ってきたSalesian Youth Day青年夜間巡礼。2017年4月22～23日に迎えた第3回は、ついに東京を脱出!? 碑文谷教会を出発し、神奈川のサレジオ学院中高(横浜)、そしてカトリック鷺沼教会(川崎)への道のり:約20kmにチャレンジしました。

●文・写真/SYM JAPAN事務局

22日夜、碑文谷教会に約40人の仲間が集結しました! 碑文谷教会信徒の皆様が用意してくださった夕食を食べ、青年スタッフが企画したレクを楽しみ、〇×クイズでドン・ボスコについて学び、聖堂で祈りをささげて出発。中間地点のサレジオ学院では校長の鳥越神父様が軽食を用意して迎えてくださいました。聖堂で祈りをささげて再出発し、苦しい坂道を上って鷺沼教会に到着! 榎本神父様司式のミサにあずかり、分かち合いをしたあとは、鷺沼教会の青年とBBQを楽しみました。夜間巡礼のためご協力くださった皆様、この場を借りて感謝申し上げます。

今回の巡礼では、一人ひとりが巡礼中に祈りたいこと・考えたいことを記した小さなカードを持って歩き、中間地点のサレジオ学院聖堂でテゼの祈りと共にカードを奉納しました。その内容は、テーマ「We are FAMILY!!」を受けて自分の家族を思うものや、サレジオ家族のこれからの希望をよせるもの、神さまへの感謝、若者らしい迷い・不安など、さまざま。本ページでは、そのありのままが伝わるように、実際に青年が書き込んだカードをそのまま掲載しました。仲間とともに、イエスとともに夜を歩いたサレジオ青年たちの祈りを分かち合いたいと思います。

ゴール地点のカトリック鷺沼教会の前で全員集合!



カトリック碑文谷教会
⇒サレジオ学院中・高
⇒カトリック鷺沼教会



第3回 Salesian Youth Day

青年夜間巡礼

参加者からひとこと!

“サレジオ”というだけで学年・男女・所属を問わず、青年がつながり共に活動できることがSYMの最大の魅力だと感じています。今回はサレジオ学院・サレジオ高専・目黒星美学園の同窓生・生・若手教員と、鷺沼・下井草・調布・碑文谷教会の青年、そしてDBVG(ドン・ボスコ海外青年ボランティアグループ)・野尻湖少年聖書学校の参加経験者が集まりました! 同世代のサレジオ青年と過ごす時間は純粋に楽しいです。無邪気に汗をかいたり、普段話さないような難しいテーマを分かち合ったり、心を一つにして祈ったり……。企画のたびに新しい参加者がいて、いつも刺激をもらいます。あなたもSYMしませんか? 楽しみに待っています!

SYM JAPAN事務局/サレジオ高専OG 遠藤ゆりえさん

巡礼中に
祈りたいことを
カードに書いて
歩きました!

自分や周囲の人が、
神様への祈りに参加したい。
出来たら。

「家族」であるために
できることは何だろう?
クラス学校が「家族」であるとは
何かを考えた。

将来の道について
考えながら歩く。

この数ヶ月の間に、私は自身
の宗教科について問わねばならぬ
ことが多くあり、そこで自分には何か
確固たる信仰心のようなものを
つぎました。思いもよらずにも
今回の巡礼でキリスト教の
信仰心はどのようにして育ち
てきたのかを改めて考えること
ができました。

今日この巡礼に参加した仲間たち、
参加できなかった仲間たちが
関わってくださったことに感謝
の気持ちを込めてお礼の言葉を
残させていただきます。

私達、みんながそれぞれの
家族、友達と今後どう
かがありたいという思い、
かかわってほしいという
思い、もつたこのSYMの
メンバーという家族のこと

定よ!わたしたちと一緒に下を
歩きたい!わたしたちが
あなたの愛の内に一つに
なりたいように。 We are family in YOU!

この活動を通して、
99%のサレジオ青年が「神様を信じて
信仰を深めたい」と
思っています。

サレジオの精神が
日々に伝わり、それが
このからの自分に必要は
助けと、お返しして
いきたいと思います。



What's
SYM
JAPAN?
SYM JAPANとは

SYM (エスワイエム) はSalesian Youth Movement (サレジオ青年運動) のことで、1980年代ごろにイタリアから始まったサレジオ青年による青年のための世界的な運動です。日本ではドン・ボスコ生誕200周年を記念した2015年8月に、SYM JAPANとして活動が始まりました。SYM JAPANは「日本においてドン・ボスコの呼びかけに応え、若者らしい生き生きとした活動を目指す

青年の運動」です。次の3つの目的をもって活動しています。

1. 教会や学校の枠を超えて、サレジオのつながりを意識する
2. 共に楽しみ、祈り、喜びを分かち合う
3. ドン・ボスコの精神を大切に、それぞれの道を見つけていく

対象は、この運動に興味のある または サレジオ家族

にかかわる18～30歳のすべての青年男女(高校生を除く)です。定期的な活動には、第1回から夜間の徒歩巡礼を行っている春のSalesian Youth Day(年1回)や、泊まりがけて国内外を巡礼するSYM夏合宿(年1回)、カトリック浜松教会での司牧活動(2-3か月に1回)、スポーツ・ミサ・食事・分かち合いを共にするSYMの集い(2-3か月に1回)があります。

次回「SYMの集い」は9月9日(土) 15:00-18:00
カトリック碑文谷教会にて!

●お問い合わせ先
SYM JAPAN事務局 symjapan@salesians.jp
SYM JAPAN公式LINE@アカウント @pzs3581n
活動情報をいち早くお知らせします!ぜひ登録してね!

公式LINE@アカウントQRコード





若者によるプロジェクト始動!
ウィーデス ジャパン
VIDES JAPAN

ウィーデス
VIDESは、青少年教育を使命とするサレジオン・シスターズによって創設された国際的なボランティア団体です。日本でも海外・国内向けのさまざまなプログラムを展開中。活動に参加し、自発的に企画・運営する若者たちの活躍を紹介します。

●文・写真 / VIDES JAPAN事務局

写真左 / ドン・ボスコ生誕200周年閉幕イベントで「ボスコ劇団」と目黒星美学園の在校生・同窓生有志がドン・ボスコの劇を熟演。写真右 / 「若者錬成会」では活動・折り・寝食を共にしながら親交を深め、VIDESの精神を満喫!

若いメンバーが続々と参加

「青少年は奉仕活動を通して教育的・宣教的に豊かに成長する可能性を持つ」と信じたサレジオン・シスターズ(修道会)が1991年VIDESを立ち上げたことを受け、日本管区でも1994年にVIDES JAPANを発足。当初は、助けを必要とする人びとのための簡単な支援活動や、資金集めのささやかな活動から出発しました。23年経った今、VIDES会員である親のそばで活動を見ていた幼い子どもたちが心身ともに成長し、その精神と活動を受け継いでいるケースも少なくありません。若者たちは次々に仲間を呼び、生き生きと活動している魅力ある大人の周りに集まってきました。

現在、東京と静岡を中心に14の奉仕・支援活動があり、約170人のVIDES会員と、これらの活動に関わる大学生から30歳程度までの数十人の若者たちがいます。

さらに、静岡サレジオ(静岡県静岡市)や星美学園(東京都北区)の有志を中心とする「VIDESジュニア」の生徒たちもメンバーに加わり、文化交流やバザーを通して貧しい子どもたちの支援や奉仕活動、文化祭での活動紹介などに取り組んでいます。

学び、変えられ、成長する体験

静岡サレジオの先生の一人は「生徒のフィリピンでのボランティア活動に毎年付き添っていますが、フィリピンの貧しい子どもたちが私に神様のことを教えてくださいました」と言います。VIDESジュニアの生徒たちも、フィリピンの子どもたちとの出会いの中で、愛とは生活を分かち合うことだと学び、変えられ、成長し続けています。体験をとおして本当の幸せをもたらしてくれるものを知るようになるのです。

若者による、若者のためのプロジェクト

学校や錬成会でVIDESの活動を知って参加した生徒が、卒業後も大学や職場で知り合った友人にその経験を分かち合い、VIDESのプログラムに興味をもった新しい仲間が集まってきます。こうして「自分にできる何かをしたい!」という同志が互いの良さを尊重しつつ、無理せず、ありのままの自分を提供していく



赤羽駅前の商業施設で「スマイル・フェスタ」を開催。ドン・ボスコの劇や楽器演奏、活動紹介などを地元のたくさんの方が楽しんでくださいました。



「若者錬成会」の一コマ。富士山麓の山荘で、日常生活を離れて共に過ごし、語り合い、祈る、充実した時間を満喫します。



海外ボランティア「カンボジア・スタディーツアー」で小学生と情操教育の授業。若者たちが学び、変えられる忘れられない機会となります。



困難を抱える子どもたちと過ごす「ハッピーハウス」で、お姉さんたちの手作りの夕食を一緒にいただきます。



2016年7月にローマで開催された「VIDES国際大会」に日本からも代表者が参加。日本の子どもたちの貧困と「ハッピーハウス」の取り組みなどを若者たちが発表しました。



VIDES国際大会の各国からの参加メンバーと一緒に、バチカンのサンピエトロ広場で。今回は34か国から約150人の若者が参加しました。

グループが形成されてきました。

ドン・ボスコ生誕200周年の2015年1月、「若者による、若者のための活動」を発信する「VIDES JAPANオブザーバー会」が東京で発足。「世界の平和建設のため、隣人と出会い、隣人を知り、「隣人を愛する」ことを実践し、具体的な活動を促進していく」ことを目的としています。

オブザーバー会の活動

東京の若者たちによる「オブザーバー会」は、VIDES JAPANの14活動(右コラム参照)のほかに、東北の被災地訪問を出発点として、独自の活動を企画・運営しています。2015年から、赤羽駅前のショッピングセンター^{ビビオ}と協力して広場で「スマイル・フェスタ」を開催。これまでに、「ボスコ劇団」メンバーによるドン・ボスコの劇の上演や、才能ある若者による楽器演奏、星美ホームの子どもたちのダンス等を披露しました。

昨年夏からは、VIDES山中サレジオ山荘(山梨県)で「若者錬成会」を開催。富士の裾野の大自然から「生きる力」を学ぶ講義や実践を体験し、高校生から30歳の参加メンバーの輪も広がってきています。

「フレンドシップ」は、星美学園内にある児童養護施設「星美ホーム」の幼稚園児と一緒に過ごす活動で、毎月第2日曜日に開催。公園や動物園への遠足、カレーや鍋を一緒に作るイベントもあり、高校生も参加できます。

長年続けているのが「海外ボランティア カンボジア・スタディーツアー」で、シエムリアップにある公立小学校やBosco Sunday Schoolの子どもたちに情操教育(音楽・図工・体育・英語・ダンスなど)の授業や文化交流をする活動です。高校3年生から大学生で参加メンバーを募り、毎年3月に8日間派遣。海外の貧しい人びとの中でのボランティア体験は、若者たちが学び、変えられる貴重な機会となっています。

昨年、日本の子どもの貧困問題に向かい合おうとスタートした「Casa di Misericordia(慈悲の家)」通称「ハッピーハウス」は、「VIDESマイン」メンバーの指導のもと、学生や社会人の若者たちが困難を抱える子どもたちの話を聞いたり、勉強をみたり、食事を準備し一緒に食べて過ごしたりしています。毎週火曜・木曜の午後5時~8時にVIDESセンターで活動中です。

これからもますます多くの若者がVIDESでの奉仕を通して、国内外の困難を抱える人びとと向き合い、深い喜びを体験してほしいと願っています。

VIDES JAPANの14の奉仕・支援活動

- ① 海外ボランティア: アジアの子どもたちとの交流。カンボジアでは文化センター・製パン学校運営など学生たちの技術指導。
- ② 学資援助: アジアの貧しい子どもたちの学資援助。
- ③ 海外物資支援: アジアの貧しい子どもたちに衣類・学用品・布地など活用できる素材を海外に送付。
- ④ ランチショップ: アジアの貧しい子どもたちへの援助。各種お弁当を調理し、星美短大で販売。
- ⑤ VIDESショップ: 青少年の心身の育成のための軽食と語らいの場。星美学園内に実施。
- ⑥ フレンドシップ: 星美ホームの2~5歳の子どもとのスキンシップ。
- ⑦ フリーマーケット: アジアの貧しい子どもたちための資金集め。
- ⑧ リストランテVIDES: VIDES紹介と活動資金調達のための調理・デリバリー、イタリアンバスタのレストラン運営など。
- ⑨ VIDESカルチャー: 個人の隠れた才能の開発促進援助と芸術作品・工芸品などの文化交流提供。売上で活動資金調達。講師も随時募集。
- ⑩ VIDESマイン: 特別に必要とする人のため宿泊サービスなどを提供。自立を目指す青年たちの体験学習支援活動。
- ⑪ VIDESアカデミー: 若者の成長のため、特技(ダンス・音楽・芸術等)の発表の場を提供。ボスコ劇団。
- ⑫ VIDES祈りの会: 世界の平和とVIDESの活動のために祈る。
- ⑬ VIDES山中サレジオ山荘: 富士山麓で教会学校や学校の研修会などに提供。
- ⑭ Mac Love: インターネットでのVIDESの活動紹介。

ウィーデス
VIDESとは? *Volontariato Internazionale Donna Educazione Sviluppo*

1991年、女性の開発教育に奉仕する国際ボランティアとして設立。現在、世界42か国に200以上のグループがあり、弱い立場にある**青少年と女性の人権保護と発展**のための教育に若者も共に携わっています。2012年、国際VIDESは、スイスのジュネーブで国連の特別協議資格をもつNGOとして認可され、「声なき人の声」をより効果的に国連に届けることができるようになりました。

日本では1994年にVIDES JAPANとして活動を始め、現在は東京と静岡を中心に活動中。2014年に創設20周年を祝い、若いメンバーを加えながら、この20年の歩みに、さらに新たな一歩を踏み出しています。

VIDES JAPANの活動に興味のある方はぜひご一報を!

VIDES JAPAN事務局 videsjp@gmail.com
〒115-8524 東京都北区赤羽台4-2-14 星美学園内
代表:シスター稲川孝子 TEL・FAX 03-3906-0070
VIDESセンター
〒115-0044 東京都北区赤羽南1-11-5 赤羽グリーンハイツ207
TEL 03-5939-7497 FAX 03-5939-7498
国際VIDESウェブサイト www.vides.org
VIDES JAPANの新しいウェブサイトは2017年秋ごろ開設予定!



▶ **都城聖ドミニコ学園高等学校** (宮崎県都城市)

地元のボランティアフェスティバルや東北被災地復興ボランティアに参加

都城聖ドミニコ学園高等学校のボランティアサークル「インターアクトクラブ」は、2017年3月12日に霧島ファクトリーガーデン(宮崎県都城市)で開催された「みやこんじょボランティアフェスティバル2017」に学生スタッフとして参加。ボランティアについて考える講座「耕心学」もあり、楽しみながら自分の役割を果たしつつ、地元の福祉活動に関わる貴重な体験となりました。

また、3月6～12日の1週間、生徒8人と教員・同窓生が東日本大震災被災地復興支援ボランティアとしてカリタスジャパン大槌ベース(岩手県上閉伊郡大槌町)での活動に参加。復興半ばの町並みをカリタスジャパンのスタッフに案内していただき、桜の苗木の植樹や施設訪問、イベント準備などを行いました。震災6年目の3月11日には平賀徹夫司教の司式による追悼ミサで共に祈りました。被災地の様子を五感で感じとり、困難や悲しみに寄り添うこと、家族の大切さなど、貴重な学びの時となりました。



岩手県大槌町で復興支援ボランティアをする都城聖ドミニコ学園の生徒たち

▶ **城星学園小学校** (大阪市中央区)

おにぎり弁当の日

城星学園小学校は、「おにぎり弁当の日」という取り組みを

続けています。毎月1度、昼食はおにぎりのみにして、我慢したおかず代を、災害や貧困で苦しむ地域へ献金します。1985年度の卒業生が、6年生の時に学級会で話し合ったことから始まり、30年以上経った現在も続いています。また、家庭から出るアルミ缶を子どもたちが集め、これを換金したお金も合わせて、困っている方々のために献金しています。



困っている方々に心を寄せながら、おにぎり弁当、いただきます!

▶ **星美学園** (東京都北区)

学園全体で盛大に祝う聖母祭

星美学園は、2017年5月24日、聖母祭を盛大に開催し、聖母行列を行いました。聖母祭は学園創立のときから毎年、扶助者聖マリアの祝日である5月24日に行われている学園で最も大切な行事です。赤羽にあるサレジオン・シスターズの修道院、星美学園(幼稚園・小学校・中学校・高等学校・短期大学)、星美ホームの学園全体が参加します。

初めにサレジオ会日本管区長の山野内倫昭神父の主式でミサが行われ、続いて学園の敷地内を、祈りと聖歌を歌いながら行列します。行列には在校生のほか、同窓生や家族の有志も参加し、聖母の取り次ぎによって世界平和のために祈りをささげます。生徒たちは聖母に献花したカーネーションを花束にして、日頃お世話になっている近隣の病院・警察・商店などに感謝のしるしとして届けました。



星美学園で行われた聖母行列の様子

▶ **静岡サレジオ** (静岡市清水区)

二人の「大使」を輩出!

静岡サレジオ小学校6年生の山本乃亜さんが、JCI JAPAN(日本青年会議所)少年少女国連大使に選ばれ、夏休みにアメリカ・ニューヨークにある国連本部に向かいます。

また、静岡サレジオ高等学校2年生の中村真唯さんが、広島・長崎両市の市民団体「高校生平和大使派遣委員会」から高校生平和大使に選ばれ、夏休みにスイス・ジュネーブにある国連欧州本部で核兵器廃絶を訴えます。



大使に選ばれた静岡サレジオの山本さん(左)と中村さん(右)

▶ **日向学院中学校・高等学校** (宮崎県宮崎市)

家族にささげる感謝の集い

日向学院中学校・高等学校では、5月に母の日、6月に父の日があることにちなんで、毎年6月に「家族にささげる感謝の集い」を開催し、多くの保護者や家族の方々が来校します。1時限目に授業参観、2時限目から「みことばの祭儀」と「アトラクション」があります。「みことばの祭儀」では、聖書朗読、校長の濱崎敦神父による話、共同祈願があります。途中、一人ひとりが家族への思いを書いた作文や詩などが代表者によって聖母マリアにささげられ、家族への感謝と思いが届くように心を合わせて祈ります。続く「アトラクション」では代表者が作文や詩を朗読します。素直な表現に心を打たれます。朗読の間には吹奏楽部や合唱部が演奏し、イベントを盛り上げます。中学1年生にとっては初舞台で、緊張している姿は初々しいです。会場の皆さんは朗読される言葉や音楽に静かに聴き入りました。



「家族にささげる感謝の集い」で作文や詩を朗読する日向学院の生徒たち

▶ **大阪星光学院高等学校** (大阪市天王寺区)

同窓生とプレゼンテーション実習

大阪星光学院高等学校では、同窓会の支援を受けて、プレゼンテーション実習が行われました。この実習は数年前よりサレジオ学院で行われている実習を参考にしており、日本IBM所属の本院同窓生を含むボランティアグループをお迎えして、講義と実習により指導してもらった、というものです。実習は2017年5月と6月の計2日間にわたり、1日目に人工知能の現状について講義を受けることで基本的な知識を身につけた上でアイデアをまとめ、約1か月後の2日目に「人工知能がもたらす未来の技術」についてプレゼンテーションを披露しました。堂々と、そして理路整然としたプレゼンに高評価も続出。質疑応答も白熱し、刺激的な時間となりました。



プレゼンテーションを披露する大阪星光学院の生徒たち

▶ **サレジオ学院** (横浜市都筑区)

小学生と遊ぶ体験

サレジオ学院のカトリック研究会とジャグリング同好会は2017年6月、地元にある南山田小学校の放課後キッズクラブを訪問し、小学生と遊ぶ体験をしました。ジャグリング同好会は経験のある先輩たちが上手に後輩を導き、今回初めて参加したカトリックメンバーは、小学生と遊ぶ楽しさを感じながらも、よい体験ができました。



小学生にジャグリングを披露するサレジオ学院の生徒

学校

サレジオ家族教職員養成講座 2017年度スタート



サレジオ家族教職員養成講座で学ぶ参加者たち

2017年5月12日より、サレジオ会の研修施設サイテック(東京都杉並区)にて、2017年度サレジオ家族教職員養成講座が始まっている。サレジオ家族の学校や児童福祉施設に勤める教職員ら約40人の受講者が参加し、盛況のうちにスタートした。今年度も浦田慎二郎神父(サレジオ会)を担当司祭として、教職員や同窓生のコーディネーターを中心に講座内容を企画、2か月に1回のペースでドン・ボスコと教育についての学びを進めていく。

サレジオ工業高等専門学校 IUSサレジオ高等教育機関 EAO地域会議を開催



IUSサレジオ高等教育機関EAO会議の参加者。サレジオ高専にて。

東アジア・オセアニア(EAO)地域のサレジオ高等教育機関部門(IUS)は、2017年4月22~26日、初の地域会議をサレジオ工業高等専門学校(東京都町田市)で開催した。会議には、フィリピンからドン・ボスコ・

マンダロン工科大学、ドン・ボスコ・カンパニオン大学、ドン・ボスコ工科大学(セブ)、パプアニューギニアから東ボロコ・ドン・ボスコ工科大学、ドン・ボスコ・クムギ工科大学、日本からサレジオ高専、以上3か国6つの教育機関の代表13人が参加した。

IUS指針2016-2021、司牧指針やリーダー養成、共通計画、ネットワーク作りなどについて討議が行われ、IUSロゴ・コンテストの開催や、合同のウェブサイト、「サレジオ・カリスマと高等教育」に関する出版などのアイデアが出された。

初のEAO地域会議は、家族的な絆を深め、ネットワークと協力関係を築き、特に最も助けを必要とする若者の教育と福音化への共通のサレジオ的情熱を深める機会となった。

同窓生

育英ファミリー会 育英ファミリーの集い開催



育英ファミリーの集い参加者。サイテックの植樹した桜の前で。

2017年4月1日、第11回「育英ファミリーの集い」が、かつて育英高専(現サレジオ高専)のあったサイテック(東京都杉並区)で開催され、約100人の同窓生と家族が集った。初めに、植え替えられた桜の祝福式がサレジオ会日本管区長・育英ファミリー会名誉会長の山野内倫昭神父の司式で行われ、皆でドン・ボスコへの祈りを唱えた。懇親会ではスロイテル神父、伏木神父はじめ懐かしい方々との再会を喜びつつ、恩師手作りの焼きそばが振る舞われ、家族連れの子どもたちは電気自動車や電気機関車の体験を楽しみ、ビンゴ大会も大盛況だった。

サレジオ同窓会日本連合 共通ピンバッジが完成



サレジオ同窓会日本連合の新しい共通ピンバッジ

サレジオ同窓会日本連合(サレジオ高専、サレジオ小学校中学校、サレジオ学院、大阪星光学院、日向学院)は、各同窓会のつながりと連携を深めるしるしの一つとして、共通デザインのピンバッジを製作し、2017年以降順次、各校を新たに卒業する同窓生に贈呈していくこととなった。新しいピンバッジには、ドン・ボスコの横顔と「SALESIO ALUMNI JAPAN」の文字が刻まれている。サレジオ同窓会日本連合の加盟校の同窓生総数は4万7千人におよぶ。

扶助者聖母会同窓会 日本管区ユニオーネ総会開催



ユニオーネ総会参加者。星美学園にて。

2017年4月23日、扶助者聖母会日本管区連合 ユニオーネ総会が星美学園短期大学(東京都北区)で開催された。ユニオーネ日本管区連合は、星美学園短期大学、星美学園、星美ホーム、目黒星美学園、静岡サレジオ、城星学園、明星学園、小百合ホームの各同窓会で構成されている。2017年度の総会にはサレジオ・シスターズ副管区長の武石総子シスターをはじめ40人以上の同窓会役員とデレガータ(同窓会担当のシスター)が出席。またオブザーバーとしてサレジオ

同窓会日本連合の役員2人も参加した。

初めにサレジオ会の吉田利満神父の司式でミサが捧げられ、総会では各支部の活動報告と計画の発表があった。昼食会に続いて、「扶助者聖母会同窓生のアイデンティティ」についてのプレゼンテーションや、武石シスターによる小さな命を守る「円ブリオ」活動の講話を聞き、同窓生として何ができるかを参加者全員で話し合った。

サレジオ学院同窓会 25歳と50歳の同期会



サレジオ学院同窓会の同期会。同校の学生食堂にて。

サレジオ学院同窓会(神奈川県横浜市)は、2017年5月13日、同窓会理事会に続いて、21期と46期生の同期会が学生食堂で行われ、同窓会理事を含め100人近くが集い、再会を喜びあった。サレジオ学院では「25歳の男づくり」を掲げており、毎年25歳とその倍の50歳になる期の同窓生が集う機会を同窓会が提供している。参加者には同窓会ピンバッジがプレゼントされた。

青少年

YCC (Youth Catholic Camp) 日向学院海の家で開催



YCCの参加者。日向学院海の家にて。

2017年3月27~30日の4日間、毎年春休み恒例のYCC(Youth Catholic Camp)が日向学院海の家(宮崎県日南市)にて開催された。今回の「FIAT!! 聖母マリアに学ぶ」をテーマに、九州各地のカトリック学校や教会の中高生約60人が参加し、大自然の中で充実した時を分かち合った。

サレジオ家族 青少年の集い 調布サレジオ神学院で開催



サレジオ家族青少年の集いの参加者。調布サレジオ神学院聖堂にて。

2017年6月3~4日、調布サレジオ神学院(東京都調布市)で、関東近辺のカトリック教会の小学3年生から高校生まで約60人が集まり、青少年の集い(錬成会)が開催された。今回は「We are Family ~いのちと愛の交わり~」をテーマに、「神様によって招かれた私たちは、教会という大きな家族の一員となり、それぞれ役割(使命)が与えられている」ことを学びながら有意義な時を過ごすことができた。

このイベントは、サレジオ家族の3修道会(サレジオ会、サレジオ・シスターズ、イエスのカリタス修道女会)が合同で企画・開催している。

教会

サレジオ6教会の集い カトリック碑文谷教会で開催



サレジオ6教会の集いの参加者。碑文谷教会にて。

2017年6月11日、第47回サレジオ6教会の集いがカトリック碑文谷教会(東京都目黒区)で開催され、サレジオ会が司牧を担当する首都圏の6教会(足立・鷺沼・下井草・調布・碑文谷・三河島)から約200人が参加した。今回は「召命」に焦点を当て、碑文谷教会主任司祭のアキレ・ロロピアナ神父、同教会助任司祭の三島心神父、サレジオ会日本管区長の山野内倫昭神父、東アフリカ管区から一時帰国中の森戸千尋神学生が召命について語った。日本だけでなく世界的な視野で召命を考えること、大人が若者にしっかり同伴し彼らの歩みを支えること、日本の教会とサレジオ会の召命のために祈り具体的に行動することの大切さを参加者一同で確認した。聖体賛美式では祈りと荘厳な聖歌がささげられ、親睦会では各教会の近況報告と交わりのひと時を楽しんだ。次回は2018年、調布教会で開催予定。

修道会・信徒の会

サレジオ家族 サレジオ霊性セミナーを開催



関東地区サレジオ霊性セミナーの様子。イエスのカリタス修道女会管区本部にて。

2017年2月11日、関東地区のサレジオ霊性セミナー&シンポジウムが、イエスのカリタス修道女会管区本部(東京都杉並区)にて開催され、サレジオ家族のメンバー約150人が出席した。2017年のサレジオ家族年間目標(ストレンナ)に関するフェルナデス総長のビデオメッセージを視聴した後、岡本大二郎神父(サレジオ会)が今年1月にローマで開催されたサレジオ霊性週間の内容をふまえながら講話を行った。共感、扉を開けること、寄り添うことが必要とのフェ

ルナンデス総長の言葉を紹介し、「笑顔で自然に迎え、できることをする」サレジオ家族の精神が大切だと語った。

午後は「日本の家庭の現状と私たちにできること」と題したシンポジウムが行われ、教育・心理・児童福祉の現場から4人がパネリストとして登壇。現代の家庭の諸問題に対して、①大人がネットワークを作って子どもの問題に適切に対処すること、②当事者の子どもや親の気持ちにむくように努めること、③宗教的なことを自然な形で伝えること、④課題を抱える子どもに愛情をもって接し、彼らから学ぶ姿勢をもつこと、などの重要性が指摘された。

サレジオ霊性セミナーは、長崎地区、大分地区でも開催された。

イエスのカリタス修道女会 ボリビアに宣教女を派遣



山下千賀子シスター（前列中央）を囲んで

2017年4月、山下千賀子シスターがボリビア・サンタクルスへ宣教女として旅立った。貧しい子どもたちのための乳幼児施設の修道院で1年間を過ごす予定。この施設では、シスターたちが職員と共に、0歳から6歳までの親がいない子どもや、貧困、親の薬物依存などの理由で入所する子どもたち約70人のために働いている。子どもたちは安心して生活し、養育・医療・教育を受けられるが、施設の運営は職員の給料も払えないほど困難な状況。現在、アメリカと日本の支援を受けて乗り切っている。山下シスターの活動とボリビアの子どもたちの上に神の豊かな祝福と恵みがあるようお祈りください。

サレジオ会 谷口亮平新司祭 誕生



谷口亮平新司祭。碑文谷教会での叙階式にて。

2017年4月30日、カトリック碑文谷教会（東京都目黒区）で、ヨハネ・ボスコ谷口亮平新司祭の叙階式が行われた。司祭団45人と約600人の参列者に見守られ、新司祭が誕生した。叙階式の説教で岡田武夫大司教は、「特に今日の日本では“子どもの貧困”が深刻な問題となっています。青少年を使命の対象とするサレジオ会員として、物質的・精神的に特に弱い立場にある子どもたちに“あなたはかけがえのない大切な存在だ”と伝え知らせることができるよう願います」と新司祭に語りかけた。

谷口新司祭は、記念の花束を祖母に手渡した後、「今こうしてこの場に立っているのは、神様のご計画であると思います」と語った。谷口神父は、フィリピン・マニラのパラニャケ国際神学院で引き続き2年間、青少年司牧の勉強を続ける。

サレジオ・シスターズ CIAO 青少年司牧セミナー開催



CIAO 青少年司牧セミナーの参加者。富士の聖母にて。

2017年4月25日～5月2日、サレジオ・シスターズのローマ総本部主催による

「CIAO（東アジア管区協議会）青少年司牧担当者研修会」が、サレジオ・シスターズ山中修道院で開催され、東アジア管区の管区長と青少年司牧部門のシスターなど約40人が参加した。

会合はミサで始められ、各管区の紹介、青少年司牧の現状報告、グループ討議・発表などのほか、富士山2合目にある「富士の聖母」や、調布にある管区本部、目黒星美学園中学高等学校など日本の司牧現場も訪問。学校では授業の見学や、生徒たちによるボランティア活動報告、ダンス演舞の披露など、参加者は日本の歓迎を喜んだ。

サレジオ霊性の学び、アジア太平洋地域における青少年司牧の実践と課題など、家族的な交わりの雰囲気の中で分かち合い、実り多い研修会となった。

ADMA 扶助者聖マリアの会 東京と浜松グループの合同黙想会開催



ADMA 合同黙想会の参加者。浜松司牧センターにて。

2017年4月22～23日、ADMA（扶助者聖マリアの会）東京と浜松グループの合同黙想会が、カトリック浜松教会（静岡県浜松市）で行われた。東京からは11人が参加、1日目に講話とゆるしの秘跡、聖体賛美式があり、23人（ブラジル人9人、日本人7人、ペルー人5人、フィリピン人2人）がADMA浜松に入会した。入会のためには約1年間、月1回の集いに参加しながら準備する。

黙想会は、サレジオ会日本管区長の山野内倫昭神父、ADMA担当の山野内公司神父のほか、ヒエン神父とアンブロジー神父も協力して4か国語で行われた。23日のミサ後、事故に遭った青年と、病気を抱えて死を迎えた方についての証しに耳を傾けた。合同黙想会は信仰の体験を身近に感じ、祈る使命の重要性を意識できた集いとなった。



2017年7月31日発行(年2回1月・7月発行)

編集人 関谷 義樹
発行人 山野内 倫昭
発行所 カトリック・サレジオ修道会
「ドン・ボスコの風」編集事務局
〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12
電話:03-3353-8355 Fax:03-3353-7190
Eメール: dbw@salesians.jp
編集・デザイン制作 ドン・ボスコ社
印刷所 日之出印刷株式会社

本誌掲載の記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。
© カトリック・サレジオ修道会 2017

「ドン・ボスコの風」について

「ドン・ボスコの風」はサレジオ会創立者ドン・ボスコが1877年に創刊した“Bollettino Salesiano”の日本版。サレジオに関わる人びとの生き方や活動を紹介し、サレジオ家族の絆を深めるサレジオ会広報誌です。

本誌をご希望の方へ ご寄付のお願い

本誌をご希望の方は、上記奥付の「ドン・ボスコの風」編集事務局までお申込みください。本誌は無料配布ですが、趣旨にご賛同くださる皆様のご支援をお願いします。下記の振込口座まで（または本誌綴じ込みの払込用紙にて）ご寄付いただいた方には次号より1部贈呈いたします。

郵便振替口座番号 00100-7-412947
加入者名 「ドン・ボスコの風」編集事務局



次号No.20は 2018年1月発行予定です。

「ドン・ボスコの風」バックナンバーは、サレジオ会ホームページ <http://salesians.jp> (トップページの「ライブラリー」) → 「ドン・ボスコの風」でご覧いただけます。

編集後記

「家族、家庭と言われて連想するものは？」と周囲の人に聞いてみました。多かった答えが食卓、団欒でした。それを通して人は自然に命と愛を学んでいくのです。孤食が増えている現代社会。私たちができる小さな一歩は何かを考えていきたいものです。
(S)

本誌へのご意見・ご感想、 サレジオ情報をお寄せください

プレゼント
付き!

本誌へのご意見やご感想、またサレジオ家族の学校・施設・活動グループ・教会・修道院での出来事の写真とコメントを、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・ご希望のプレゼント(下記A～D)を明記し、お送りください。

ご記入いただいた個人情報は賞品発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

応募締切 2017年10月31日

[Eメール] dbw@salesians.jp

[F A X] 03-3353-7190 (「ドン・ボスコの風」編集事務局宛)

[ハガキ] 〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12
サレジオ会日本管区本部 「ドン・ボスコの風」編集事務局



A 『チマッティ神父のススメ』 しおり10枚セット2種

初めて日本へ渡ったサレジオ会宣教師、尊者 ヴィンチェンツォ・チマッティ神父のしおり。表面にはチマッティ神父のススメと貴重な写真、裏面にはススメに関連するチマッティ神父の言葉を収載。

H125×W40mm オールカラー
©チマッティ資料館

B 漫画『コラッジョ!! ドン・ボスコの夢は続く』

夢を描けず、人間関係に疲れた2人の高校生リクとマナが、19世紀のイタリアへ?! そこで出会ったのは神父=ドン・ボスコとオラトリオの少年たち。彼らの、共にいて信じ合い、あきらめない姿に、二人の心は動かされていく――。

サレジオ会日本管区 原作/鈴木啓作画/浦田慎二郎 監修
A5判並製 206頁 ドン・ボスコ社



C 『マリアのおはなし』

マリアは、イエスのお母さんになって、とても幸せでした。つらく苦しいことも、イエスといっしょに、愛する神さまと人びとのためにおさげした聖母マリアの物語。やさしい色づかいが魅力の絵本。

[小学校低学年～/総ルビ付]
マイテ・ロッシュ 絵と文/竹下節子 訳
H257×W227mm上製 39頁 ドン・ボスコ社



D 『高山右近 歴史人物ガイド その霊性をたどる旅』

血で血を洗うような戦国時代、生涯カトリックの信仰を貫き晩年は国外追放された一人のキリシタン大名、高山右近。その人生と信仰の歩みをたどる旅に、ご一緒に出かけませんか。オールカラー、ゆかりの地の写真満載。

ドン・ボスコ社編集部 編
B5判並製 127頁 ドン・ボスコ社



(Aはドン・ボスコ社およびチマッティ資料館、B～Dはドン・ボスコ社および一般書店にて取扱可)



写真: 2017年5月 メキシコの若者たちとフェルナンデス総長

Message from the
Rector Major

サレジオ会総長メッセージ

世界は皆さんを必要としています

若者の皆さん、今日の世界はあなたを必要としています。世界中いたるところで、生きること、夢見ること、深い真の幸福を探すことを恐れない、希望と力に満ちた若者たちが必要とされています。

献身することに魅かれ、マザー・テレサが言っていたような「痛みを感じるまでの」犠牲と愛を捧げられる若者たちを、世界は必要としています。献身する心で、自分の時間、自分自身をも与えることのできる若者たちです。これはとても高い目標ですが、ド・ボスコが若者たちに求めたことなのです。

若者たちは他の若者をよく理解し、助けることができます。気力がなく、退屈し、夢を失った若者、何かに夢中になったことが一度もない若者も大勢います。そういう若者たちは、同じ若者の言葉で人生について真剣に語り合い、生き方や可能性を示してくれる友人を必要としています。

私は若者たちを信じ、祈り続けます。信仰のうちに歩もうとする若者、模索している若者、道を見失ったと感じている若者たちのために。神はご自分の息子や娘をだれひとりとして、決して見捨てることはありません。

サレジオ会総長
アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父